



昔の足

私の手

あなたの手

明日の手

今の足

05

魂の再生

めぐりゆく季節と

鳥海山麓に伝承される
太陽と火の思想

2022年にスタートしたにかほ市での「ジオカルチャー研究プロジェクト」は、鳥海山麓地域に広がる自然環境の雄大さと時代を貫く文化の奥深さを私たちに教えてくれた。およそ3年間の調査期間中、私たちは特に象潟地区の大潤海岸と鳥海山麓の横岡や大森で行われている上郷の小正月行事にみられる、興味深い時空の構造に関心を持ってきた。

たとえば象潟の海辺で行われる盆行事の小屋建て（盆小屋行事）は、山側の上郷で行われている小正月の小屋焼きの行事と同じ主題を反復している。二つの行事を構造的に読み解くならば、「海」夏に対する「山」冬」というわかりやすい二項対立が見えるが、どちらの行事にも、特に子どもたちが主役になつて、異界から目に見えない祖霊や精霊を迎える、という主題が現れる。二つの地域において、二つの季節に、それぞれの住人が別々の仕方での主題を繰り返すのだ。

お盆の時期に死者の世界から帰還する祖先の霊や、正月という特別な時期に異界から訪れるという歳神様は、かつては子どもたちが盆と正月に建ててその中に籠ったというコスモロジーカルな構造物と、どちらも深く関係している。神話学の知見から言えば、薬小屋は象徴的な母の子宮であり、子どもたちはその中に籠り、先輩・後輩の関係性の中で薬の編み方や祭りの作法などの知識を共有していく。かつてはそうして行事の次

第を伝達しながら、一定期間が過ぎると小屋を焼き払うことで、象徴的に生まれ変わる儀礼が継承されてきたのかもしれない。

夏と冬、海と山の間で、鳥海山麓の子どもたちは胎内からの再生という同じ主題を奏奏する。地域の子どもたちは、こうして祖先の霊や歳神と緒に大地の母の胎内に籠り、そこから生まれ直す行事を繰り返す。つまり、一年の中で最も厳しい暑さと寒さの季節に、目に見えない霊的な存在を迎え、やがて元にした世界にお返しすることで、自分自身を前よりも少しだけ大人に近づけてゆくのである。ここで重要な役割を果たすのが、火というエネルギーの再生力なのだ。

ここで私たちは、山形県側の庄内平野で月山と鳥海山を対の神として「月山」に対して「ヒヤマ」（比山、日山）とする山岳信仰と太陽信仰の結びつきがあったこと、さらに秋田県側でもこの山を荒ぶる火山「火の山」として太陽と火を結びつける古代的な伝承があったことを思い出さずにはられない※1。鳥海山麓には、太陽や火のエネルギーを中心に、精霊と共に小さな死と再生を繰り返してゆく異種や霊との共存意識を重視した思想が継承されている。子どもたちはここで、目には見えないものを受け入れ、共存しながらも、毎年階段を登っていくように少しずつ成長していく。現在のように学校の卒業・入学や学年の進学が私たちの意識を変えていくようになる前までは、各地域の子ども集団が、自発的にそのような先輩・後輩の関係性を作り、家族集団や血縁集団とは異なる人間関係によつて、地域の行事を支えてきた。このような活動の根幹は、火を起こし、管理し、

うな「山籠り」の行事に通底するものでもある。私自身、かつて出羽三山の修験道を研究し、実際に秋の峯入り修行に参加することで、一度自らが死装束を着た死者となつて山という大地の子宮に籠り、十界修行と呼ばれる異界遍歴を経て最後に赤ん坊となつて再び生まれ直す、という修行を体験した。出羽三山においてもまた、火や水がコスモロジーの中核にあった。かつては出羽三山の角を成すと考えられてきた鳥海山においても、このような魂の再生を目指す、胎内回帰の修行が行われていたのかもしれない。

こうしてわずかに離れている海辺と山裾の間で、象潟町の人びとは季節の中で生きる魂の儀礼を継承し、未来に伝えようとしてきた。にかほ市の他の地域でも、それは同様である。これほどまでに近い「海と山の間」で、亡くなった人びとの霊や生きている人びとの魂を季節と共に更新し、人間の歴史を越える時間軸の中で独自の文化を生み出すということは稀有なことであるに違いない。噴火を繰り返す火山やそこから溢れ出す溶岩、地震と共に隆起する大地、湧き出す温泉、そして豊富な海や山の恵みを享受しながら生きること。そして、その中で季節行事を編み出し、実践することは、おそらく人間が自然に抱かれて生きるという歴史の根幹に触れる体験だ。鳥海山麓に広がるこの環境と季節の祭りは、土地と人間の深い関係性に根差した「ジオカルチャー」に関わる重要な示唆を、現代人に与えてくれるに違いない。

石倉敏明

（人類学者、秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授）

燃やすことに関わっている。

このような行事の構造は、福島を中心に東北全域に広がるハヤマ籠りや初山行事、さらに羽黒修験道の秋の峯入りのよ



2024年10月26日(土)スケジュール

シンポジウム

会場 | にかほ市総合福祉交流センター スマイル

「これまでの活動報告」

井上宗則 | 秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授

基調講演

「凸凹地形から読み解く、まちの歴史と魅力」

皆川典久 | 東京スリパチ学会会長

ショートレクチャー

「流れ山の作り方・流し方 ver.金浦」

大野希一 | (一社)鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会

事務局次長兼主任研究員

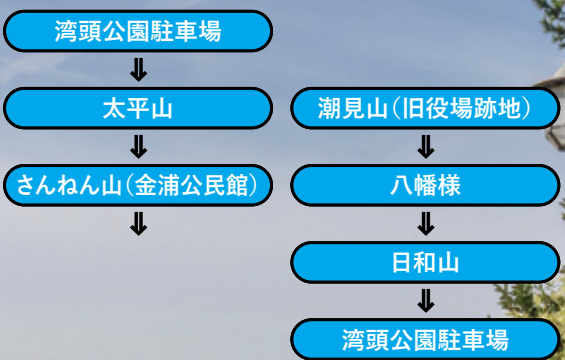
ディスカッション

皆川典久、野内隆裕(路地連新潟代表)、大野希一、井上宗則、石渡雄士(秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授)

2024年10月27日(日)スケジュール

まちあるき

齊藤浄 | 生涯学習一級インストラクター(地球科学)
鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ジオガイド



地形から知るまちの昔と今

「ながれ散歩」でめぐる金浦

鳥海山の山体崩壊によって形成された「流れ山」は、仁賀保・金浦、象潟地区に広がっています。このユニークなランドスケープを楽しむイベント、いっぽに「なにかは」「ながれ散歩」は今回で3度目の開催となりました。2日間に及んだ「ながれ散歩」は、初日に東京スリパチ学会会長の皆川典久氏をゲストに招いたトークイベント、2日目には金浦を舞台にしたまちあるきを行いました。



スリパチ学会流、まちの楽しみ方

瞬間的につくられた地形

その後も皆川氏は仙台、新潟、名古屋、大阪、横浜など様々な土地の地図をクイズ形式で示しながら、凸凹地形に着目してその魅力を読み解いていきました。「地形を見始めるとこれだけをツマミに、いくらでも飲めると楽しいに話す皆川氏の語り口は、地形とその土地の歩んできた歴史いきいきと接続し、聴衆を見知らぬ土地の小旅行へと連れ出します。

最後はスリパチ学会流、まちの楽しみ方を紹介。12個に及ぶ楽しみ方のポイントには、窪地に注目する、古地図を参照する、水に注目するといった基本的なものから、空はつながっている、来るもの拒まず、団結はしないといったちょっと変わった項目も。

「空はつながっているというのは、地形でまちを歩いてみると行政区分はあまり意味がなくて、地形はどこまでもつながっているし、楽しみ方は世界共通なんだという事です。団結はしないというのも心掛けていること、学会というのはどうしても閉じ気味、地理学会、地形学会、地図学会と分かれているけれど、もっと分野を横断して楽しもうよ、と、それがまちあるきのコツかなと思います」



『ながれ散歩』がうまくいった原因は何か。どうすればこうした地域振興の取り組みができるか」という質問には、新潟でまちづくりの取り組みを行う野内氏が回答。『楽しんでるところに人は集まると思っています。今はインターネットが普及していなかった頃、ホームページで自分の好きなものを発信していました。やがて学生さんや地域の人が集まってきて、行政の方も手伝ってくれることになって、新潟の小路めぐり・日和山の整備などにつながっていきました』

次は、鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の大野希一氏によるレクチャー「流れ山の作り方・流し方」。鳥海山の山体崩壊と流れ山の形成の過程をユニークな切り口で解説するこのレクチャーも今年で3度目です(手長足長Vol.02.03参照)。「流れ山を形成した岩層なだれはわずかに5分の出来事。カッパどんがでまがめるまでの時間と同じです。大野氏は今年も随所にユーモアを交えながら流れ山の形成過程を解説しました。

レクチャーの後にはゲストを交えたディスカッションに移ります。皆川氏、大野氏に加え、新潟路地連代表の野内隆裕氏、秋田公立美術大学から井上宗則准教授、石渡雄士准教授が参加。ディスカッションは井上准教授の司会で進行し、聴衆からの質問を交えながら活発に意見交換が行われました。

石渡准教授は皆川氏の講演を振り返りながら、以下のように話しました。「東京の地形は、湧水や川に侵食されてできあがっているのが特徴ということでした。今日の主役の流れ山は、全然違う理屈で地形ができていますね。流れ山は水が作った地形ではなく、たった5分で形成されている。地形というのは千年とか数万年とか、そういう単位で徐々に作られていくものだとばかり思っていました。そのイメージがガラッと変わりました」

ここから「流れ山のように瞬間的に形成された地形」というのはあるのか」という話題で盛り上がります。「東日本大震災で津波の被害を受けた海岸を歩いたとき、海岸沿いに砂が溜まっていた。浜堤というのは長い時間をかけて徐々にできるんじゃないかと、瞬間的な洪水や津波の積み重ねによってもできるものかもしれないとリアルに感じました」と語るのは皆川氏。大野氏は「火山というのは人をびびりさせるくらい短期間で地形を変えてしまうことがあります」と、第二次世界大戦末期の北海道でわずか2年ほどの間に形成された昭和新山を紹介しました。

会場からは質問も多く出ました。



流れ山を歩き、学び、考える2日間

「流れ山」とは、火山が山体崩壊を起こし、膨大な量の土砂や岩石が堆積した上にできる突起した地形のこと。井上宗則准教授による「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」では、これまで目が向けられることが少なかった象潟以外の流れ山を対象に研究を進めてきました。流れ山をのちのまちづくりにおける重要な地域資源として捉え直すため、トークイベントとまちあるきの2本立てで実施しているのが、「いっぽに」は「なにかは」ながれ散歩です。今回は3度目の開催にして初となる2日間の構成。

初日は、にかほ市総合福祉交流センター スマイルでトークイベントを実施。東京スリパチ学会会長の皆川典久氏が「凸凹地形から読み解く、まちの歴史と魅力」と題して講演を行いました。

凸もいっしょ凹もいっしょ

地形に着目するとどんなまちにも必ず魅力が見つかる」と語る皆川氏。にかほ市と東京都港区の地形図を並べながらそれぞれの地形について話し始めました。

「今日は喧嘩を売りにきたわけじゃないですが、流れ山の凸凹地形もいけど、東京の凹地形もいろいろお話をします(笑)。象潟には九十九島というのがありますが、東京には九十九谷と呼ばれていた場所があるんです」

渋谷駅や原宿駅の西側に、現在は暗渠化されている宇多川という川が流れていました。この川に注ぐ源流群が作ったいくつもの谷間が九十九谷だといいます。

次に紹介したのは杉並区にある善福寺池。湧水が作り出した窪地であるこの池の周辺は公園として整備されており、都市のオアシスとして地域資源になっていると解説しました。また東京の窪地は渋谷川や神田川、石神井川など多くの川の湧き出る源となっていますが、知らない人も多いといいます。

「神田川の水ってどこから来たのって尋ねると、なんとなく『多摩の丘陵の古』っていう方も結構いる。しかし、これは案外近くの窪地から湧き出した川なんです。こんな不思議な地形に着目しない理由なんてないだろう、ということで窪地を紹介しようと思ったのがこの東京スリパチ学会なんです」

地形に着目することは、そのまちの成り立ち、歴史、産業、あるいは文化といったものを読み解くうえでヒントになるのではないかと皆川氏は語ります。



金浦の流れ山をめぐる

2日目には金浦周辺の流れ山を散策しました。前年は荒天のために行程を短縮して実施した「ながれ散歩」でしたが、今回は天気に恵まれ、多くの流れ山に登ることができた充実した時間となりました。

海沿いにある湾頭公園駐車場に集合した一行は、鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ジオガイドである齊藤浄氏の案内のもと、地図を片手に流れ山をめぐる「まちあるき」へと出発しました。湾頭公園内にある「太平山」に登り、金浦のまち並みの中にゴツゴツと浮かぶ流れ山を眺め、これから歩くコースをイメージしました。また1804年の象潟地震による隆起や、江戸時代海難者供養碑についての解説を受けました。太平山を含む流れ山の多くに石仏や石碑が残されており、土地の歴史を今に伝える役割を果たしています。

続いて「さんねん山」「潮見山」「八幡様」と巡りました。

途中、かつての汀線を示す自然石「赤石様」を見学。「赤石様」は長年所在が不明だったところ、昨年齊藤氏が発見したもので、象潟地震による隆起を実感できる新たなまちあるきスポットになりました。最後に「日和山」を巡り、再び湾頭公園に戻ってきたところで「まちあるき」は終了。参加者からは、「普段生活していっていつも目にしてる風景なのに、知らないことばかりで興味深かった」といった声も。約2500年前の山体崩壊から現在に至るまでの土地と人間の歴史を今に伝える流れ山が、どのように暮らしの中に取り込まれているのかを知る時間となりました。





報告書より

新たな研究シーズの発掘②

看板から“現在”の視点を捉える

「通りの景観」をテーマに、商業店舗の看板を題材としたリサーチプロジェクトを実施。日常の当たり前の景観に目を向け、考現学的な観点から記録していくことを目指した。プロジェクトでは、店員と顧客が会話や売買を通じて直接的な関わりをもつ公の場でありつつ、建物の表面に業態やサービスを宣伝する文言を掲げることで通りすがりの人への情報を届ける間接的な公の場と考え、建物の内外で直接的かつ間接的な人との関わりを持てる商業店舗に着目した。個人商店が立ち並ぶエリアに注目し、現況を記録していくことで、現在の地域にある／あった商店のアーカイブを制作した。

【リサーチの実践】

リサーチ対象を商店の「建物」と「看板」とし、その色に注目。通りの商店から受ける景観のイメージは、建物の素材や質感、看板のフォント、その色であると仮定し、リサーチを進めた。

●対象地域…にかほ市象潟町四丁目塩越と五丁目塩越の通り

●対象物…小売店、家電量販店、食料品店などの商店の建物およびその看板

【成果物】

合計30店舗の商店を対象とした「A Perspective on the Present from the Signs」というリサーチペーパーを作成し、四丁目塩越と五丁目塩越の通りに存在する東側14店舗、西側16店舗の情報をまとめた。

折田千秋（景観デザイン専攻助手）

新たな研究シーズの発掘③

にかほ市における遊漁の魅力と情報発信の提案

にかほ市の4つの漁港（小砂川、象潟、金浦、平沢）は多様な地形が広がり遊漁に適しており、海と深く関わる文化が根付いている。近年全国的に遊漁者の増加とともにマナー違反や落水事故などが問題視されている。問題を解決し、釣り場を守るためには遊漁者へのルール・マナーの啓発が重要であり、にかほ市においては海の魅力を発信すると同時に遊漁のルールやマナーを周知するため情報発信施策を提案する。

【提案】

●遊漁マップの作成…釣り可能な場所、対象魚種、使用可能な仕掛け、マナー・規則をまとめたホームページを作成。駐車場やトイレの位置を記載し、訪問者の利便性を向上させる。釣り場にQRコードを設置し、現地で規則を確認できるよう工夫する。

●SNS、動画配信サービスでの情報発信…釣り場ごとの実釣動画を制作し、釣り方や魚種紹介とともにルールやマナー、安全管理の情報を盛り込む。漁港管理者や地元漁師、にかほ市出身の遊漁者をゲストに迎え、にかほの海に関するインタビューを実施。にかほの海や歴史、文化、特産品、行事なども紹介し、より多面的に海の魅力を伝える。
村上直樹（ビジュアルアーツ専攻助手）

象潟漁港



金浦漁港



小砂川漁港



平沢漁港



CREATE NEW RESEARCH FIELDS

野外アクティビティー領域 にかほでそとね

2023年7月、秋田県では記録的な豪雨が発生し、広範囲で浸水や土砂崩れの被害が生じた。この日、鳥海山麓でのリサーチを目的にかほ市を訪れていたが、風雨が想定を超えて強まり、計画の実施が困難となった。さらに、秋田市へ向かう道路が冠水したため、帰宅が叶わず、宿泊先に留まりながら、拡大する被害の状況を見守ることとなった。翌月、計画を改めて練り直し、快晴のもと鳥海山の山頂に立った。眼下に広がる秋田の景色は、あの日の激しい豪雨とは対照的であった。雨天と晴天、高地と低地、停滞と移動、登れなかった日と登った日——この2つの異なる出来事を通じて、秋田の地形や気象環境について改めて深く考えさせられた。本作では、過去のプロジェクトで収められた、これらの2つの時間を並列的に配置し、それぞれの事象が響き合うように構成している。後半では、鳥海山系を水源とする奈曽川と白雪川を訪れ、溪流釣りを実施。自作のルアーを用いながら沢を遡り、鳥海山が生み出す水の流れと、その周辺に広がる生態系や人の営みを記録した。

《Nikaho × Akibi Summer》撮影・編集：嶋津穂高
「にかほでそとね」から生まれた映像は、
にかほ市と秋田公立美術大学のYoutubeチャンネルにて公開中です。

新たな研究シーズの発掘①

いいいしプロジェクト(仮)

にかほ市に点在する「巨石」を中心に、その周囲から見えてくる石と生活、人、コミュニティの関係を調査し、新たな可能性を探究する。調査を通じて、田畑や住宅地、様々な場所に巨石が点在していることを確認した。「唐戸石」や「船つなぎ石」など生活と密接に関わり、信仰の対象として祀られたり名称が与えられたりした石が存在するほか、にかほ市においては他地域と比較しても石が多様な用途で活用されている。その密接な関係ゆえに石は特別視される存在ではなく、むしろ日常の一部として自然に受け入れられていると考えられた。

【提案】

本研究では、石と人々の営みを記録した小冊子（ZINE）の作成を提案する。石にまつわるマップの作成、建設業界関係者や地域住民への取材、岩石に関する考察、作品制作など多角的なアプローチを通じて石の魅力を紹介する。にかほ市における石の役割や価値を再認識し、地域の新たな魅力を発信することを目指す。
櫻井隆平（ビジュアルアーツ専攻助教）



点在する石の調査



「鳥海山麓 野生めぐり」 夏の夜の番楽と、 境界の蛇



8.14

14日は鳥海山小滝番楽を見た。番楽は他地域の「山伏神楽」に相当する芸能で、かつて修験者が伝えた演目がつて修験者が伝えた演目

今に伝えられたものだと考えられている。小滝番楽はとりわけ「作祭りの御神事」として、この地域に伝えられてきた。つまり農作業が行われる6月から8月までを中心に上演される、夏の神事芸能である。

夕方7時前に小滝集落の会館に集まると、すでに番楽を待ち侘びて熱気を帯びた老若男女の観衆が集まってきた。法被を着た舞手たちが、太鼓・笛・鉦の3種の楽器を奏でながらすぐ近くの別の集会所に移動する。番楽で最も重要な舞台装置は幕であろう。一行は幕の前で拝礼して番楽の準備に取り掛かる。観衆は広い座敷に家族や友人と集まって、思い思いに雑談しながら開演を待つ。

神楽といつても、西日本のそれのように日本神話の場面を上演するものではなく、本神話の場面を上演するものではない。番楽に欠かすことのできないのは、むしろ翁と三番叟という狂言や能に連なる中世芸能の系譜だ。冒頭の翁の演目に、まず衝撃を受ける。翁面の奥深さ。まるで野生のまま、飼い慣らされずに継承された中世の芸能が、鳥海山麓の夏の夜に蘇っ

たかのように。謡の声がまた素晴らしいのだが、キャップを目深に被り、マイクを手に歌う達人の姿は伝説のヒラフホブアーツのようだった。男女2本の笛、鉦と太鼓というシンプルな伴奏がリズムカルに神話的な空気を盛り上げてゆく。翁に続く演目は「吉田」というもので、これはこの地域でいう三番叟のことを言うのだという。

前半の神事芸能的な演目に心を惹きつけられた後、大江山の酒呑童子を退治する源頼光・源綱の故事に因んだ「大江山」、坂上田村麻呂による蝦夷征伐を題材にした「田村」などの歴史物で観衆は盛り上がってゆく。興味深いことに、ここで酒呑

童子や蝦夷役の演者が被るのは、小正月行事のアマノハギでも使用されている盃惑的な鬼人面なのだ。夏の番楽では鬼や蝦夷として成敗された鬼人が、冬の小正月には恐ろしい来訪神となって集落に回帰してくる。それは、たとえば蝦夷のようなこの土地の先住者が決して悪役なのではなく、本来はこの土地の深々とした歴史にとつて最初の尊敬すべき祖先を表すものだ、という演者の矜持と繋がっているのではないだろうか。

夜が深まってくると、子どもたちは退屈するところか、むしろ興奮して前列に

8.15

じり寄ってくる。なぜなら、熊谷次郎直実や敦盛といった勇ましい歴史劇の後、農作物の豊穡を祈るユーモラスな演目（一人餅つき、四人餅つき、空白舞など）が続くからである。正月の来訪神行事・春の延年チヨウクライロ舞、盆の番楽という二つの演目を担う卓越した演者と目の肥えた老若男女の観衆。小学生と高齢者が最前列で演目を見守る熱気。子どもたちが演者を「かっこいい」といつて憧れる一体感が、独特の高揚感を生む。（その後、15日に釜ヶ台番楽、16日に横岡の鳥海山日立舞番楽を見学した。）

日中はにかほ市から由利に移動し、かつて鳥海山の滝沢修験口の中心地となつた森子大物忌神社を調査

する。八乙女山から鳥海山に連なる山々の表情は、吹浦や蔵岡の表情よりも急峻で、同じ北麓の小滝にも通じる修験文化の雰囲気を感じる。その後、東由利に足を伸ばし、7月の水害によって毀損された道路を辿るだけ辿つてみた。東由利もまたユニークな地域文化が残る美しい集落が続く。

写真家の田附勝さんと僕たちは、そこでこの地域の「道切り」の行事のひとつで

ある薬蛇を見て歩いた。薬蛇は、由利本

莊市を中心に残っている空間境界に設置される御神体で、秋田の内陸部で信仰される人形道祖神や、津軽半島一帯で信仰されている虫送りの薬蛇に相当する。東由利の薬蛇は余計な装飾のないミマルな造形で、電柱や木、あるいは神社の鳥居に文字通りくぐるくと巻きつけられている。

興味深いのは、かつての「境界」であった薬蛇が、道路の破損部分の直前に、あたかもその破壊を防ぐ力を持っているかのように見えることだった。多くの小道が大雨による被害で塞がれているが、その原因は明らかに緩んだ土砂が崖崩れを起こして

道を寸断したものだ。しかし、まるで神聖な力に守られているかのように、薬蛇の手前には被害がほとんど及んでいないという事例が見てとれた。その理由は明らかではないが、東日本大震災の際に残された多くの神社が破壊されずに残ったように、昔からの地盤が堅固で、どの地盤が脆弱かを理解した上で薬蛇を掲げる在来

知が働いていたのかもしれない。

撮影・田附勝
フィールドワーク・石倉敏明・田附勝・大東忍・大村香琳

過去、現在、未来 人々の営みを繋ぐ 〈手〉と〈足〉

研究レポート《手長足長》の表紙絵・挿絵を描いてきた尾花賢一（アーティスト、秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻准教授）は、「手長足長は彼方にいる妖怪ではなく、過去と現在と未来をつなぐ、この土地で生きてきた人々である」と語ります。にかほ市を形作ってきた人々の営みを〈手〉と〈足〉に重ねて表現した表紙絵を軸に制作してきた《手長足長》は、今号で5号目となりました。



見えない領域を探り、 土地の輪郭を 浮き上がらせる。



秋田公立美術大学はにかほ市と連携協定を締結したことを受け、2021年度「にかほ市リサーチ」、2022年以降は「ジオカルチャー研究プロジェクト」として、にかほ市をフィールドとした協働プロジェクトを実施してきました。にかほ市に湧き上がる魅力的な風土と、美術大学による独自の研究視点が重なり合うことで、未来に向けた新たな地域資源の発掘と可能性の発見を目指すプロジェクトです。ジオカルチャーは石倉敏明（人類学者、秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授）が提起したもので、人間と自然をつなぐ統合的な生命環境としてのジオス（地球）を基盤とした文化現象の概念です。複数の方法論によって、人と大地の関係を紐解いていくことを基本構想として実施してきました。

プロジェクトでは秋田公立美術大学の教員が、助手や学生、アーティストと共に複数の研究チームを立ち上げ、地学的・生態学的・人類学的な複数の絡まり合った事象や文化、そのダイナミックで混種的な複数性の共存状況に「ジオカルチャー」の概念で迫りました。研究過程をまとめた研究レポート《手長足長》は、アーツセンターあきたのウェブサイトにて公開しています。

「にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」 「にかほでそとね」萩原健一 嶋津穂高 櫻井隆平 大平真子 青木邦仁 中田日菜子 岩城佑実 佐藤若奈 「流れ山の地域資源化に向けた基礎的研究」井上宗則 石渡雄士 石田駿太 安積凜々子 ヴライクジュリア柚巴 玉柿清花 佐藤粹 「野生めぐりにかほ版」石倉敏明 田附勝 大東忍 大村香琳 「新たな研究シーズの発掘」櫻井隆平 折田千秋 村上直樹 コーディネーター|田村剛 伊藤あさみ (NPO 法人アーツセンターあきた)

「ジオカルチャー研究プロジェクト」研究レポート《手長足長》Vol.05 2025年3月発行 デザイン|上野ゆきこ 編集|高橋ともみ 早坂葉 撮影|田附勝 嶋津穂高 菅原正寿 石倉敏明 萩原健一 ほか 表紙|尾花賢一 企画|公立大学 法人秋田公立美術大学 制作|NPO 法人アーツセンターあきた 印刷・製本|秋田活版印刷株式会社 発行|にかほ市 〒018-0192 秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地 ※本紙は、にかほ市×秋田公立美術大学協働プロジェクト「ジオカルチャー研究プロジェクト」の一部として作成しています。 ※ジオカルチャー研究プロジェクトに関するお問い合わせ NPO 法人アーツセンターあきた TEL.018-888-8137 ※本紙の無断複写・複製・引用を禁じます。